

未来への伝承

花火競技大会初期の記念写真

土浦市内で秋に行われる一大イベントとして、土浦全国花火競技大会があります。当日の市内各所には、花火目当てにたくさんの人々が全国各地から訪れ、多くの市民の皆さんも数々の花火を目にするものと思います。

この花火競技大会の歴史は古く、今から90年以上前の大正14年(1925)に、神龍寺(文京町)の秋元梅峯住職が団長を務める大日本仏教護国団の主催で始まりしました。開催の趣旨には、大正10年に現在の阿見町に開設された霞ヶ浦海軍航空隊(当初は臨時海軍航空術講習所)の殉職者の慰霊や、関東大震災後の不景気にあえぐ土浦の商業振興などがあげられています。

土浦市観光協会には、初期の花火競技大会にかかわる貴重な写真が1枚保管されています。この写真は、下妻市内で花火製造をおこなっていた野手火工株式会社から平成の初め頃に寄贈されたもので、表彰式後の記念写真と伝えられています。この中には合計42人の人々が写っており、前列中央には僧衣姿の秋元梅峯住職、その左には花火競技大会で審査長を務めた元陸軍少将の高瀬清二郎がいます。ところどころに、襷をかけた大日本仏教護国団の団員の姿が見えます。このほかの多くの人々は、全国各地から競技に参加し入賞した花火師達ではないかと思われます。

この中において、ひととき目立つ存在が中列左側で大きな旗を握る羽織を着た人物です。この人物は、山梨県の花火師であった山内祐一で、初期の花火競技大会で数々の入賞を果たしました。山内祐一の手を持つ旗には「土浦町」全国煙火競技大会」と記されますが、優勝などの文字はないことから特別な賞を授与されたのかも知れません。旗には星形の中心に「正」が入る大日本仏教護国団のシンボルマーク、右のもう一つの旗には同じ大会名に「大日本仏教護国団主催」、「優賞」の文字が入っています。

初期の花火競技大会の主催団体については、初回から昭和6年(1931)の第5回大会までは大日本仏教護国団でしたが、昭和7年の第6回大会以降は土浦町の広範な人々の協力を受け、土浦煙火協会を中心とした体制へと変わっていきます。最初の煙火協会長には秋元梅峯住職が就きましたが、昭和8年には病気のため会長職を降り、昭和9年に亡くなりました。その後、会長は豊島庄十郎になりました。

先に述べた写真の情報などを総合すると、この写真は大日本仏教護国団主催で行われた第5回大会の写真である可能性が考えられます。

この写真は、秋元梅峯住職の尽力による花火競技大会から、土浦町ぐるみの協力体制による土浦煙火協会主催の大会へと移る大きな流れの中で撮影されたものと思われます。

I―競技大会のあゆみ」の会期中、博物館で展示します。

岡市立博物館(☎824・2928)



▲花火競技大会初期の記念写真